

東北支部

昨春、仙台で開催されたORの余韻がさめず、支部活動のスタートが例年比べて遅れてしまった。研究会によるORの普及活動、会員相互の情報交換や親睦を今年度も重ねてきた。新しい会員や、興味をもたれる方々の積極的な参加を期待しているところである。

今年度開催された研究会について、簡単に報告し、支部だよりとしたい。

●1980年8月4日

テーマ 欠測データの価値

講師 Texas A&M 大学統計研究所所長 W. B. Smith 氏

Smith 教授は本支部の運営委員である東北大学経済学部竹内清教授の知友で多変量解析を専攻されておられる。当時、東北大学に滞在中で、ご多忙なスケジュールの中を、当支部研究会の講師を引き受けていただいた。われわれが手にするデータは、必ずしも完璧なものばかりではなく、一部分欠落している場合がある。このようなデータをいかにとり扱うかについて解説された。美しい夫人とお嬢さんを連れて来日していた Smith 教授は、研究会の後、仙台の“七夕祭”を楽しまれて、帰国された。

●1980年11月27日

テーマ 予測・計画・評価を統合する新手法

講師 東北電気通信局 荻野正浩氏

この手法は、日立製作所システム開発研究所の柴田祐作氏が、政策問題研究会で発表されたものである（本誌25巻11号）。この部会の合宿研究会に参加された荻野氏により、くわしい紹介がなされた。ブレーション・ストーミングとKJ法を用いた手法で、簡略化規範的計画手法と題されている。いくつかの問題点が指摘される等、参加者の質疑が活発であった。

●1980年12月17日

テーマ 日本人と数学

講師 東北大学教養部 御園生善尚氏

和算の歴史をふり返って、その中から数学に対する日本人の特性を見出し、ひいてはORに対する日本人の特性を考えようとの試みであった。日本人は中国から数学を学んだが、単なるまねごとにとらず、独創性を発揮

した歴史をもっている。しかし、当時のヨーロッパの数学と比べると、長所がある反面やはり短所があり、この短所が和算を衰微させた。現在のわが国のORがそのてつをふむ恐れはないかと指摘した。

●1981年1月12日

テーマ 出生統計に関する2, 3の話題

講師 統計数理研究所 鈴木義一郎氏

人の出生問題解析は、鈴木氏がここ数年間精力的にとりくんできた問題である。1組の夫婦が最初の子を産む確率と、2人目の子を産む確率、3人目の子を産む確率……は同一とは考えられない。このことは、家族構成数の分布を考えるうえで重要なことである。鈴木氏は、2項分布を変形して、変形2項分布による考察を試み、その一端を紹介された。データをわが国にかぎらず、広く世界に求めている興味深い内容であった。鈴木氏は、学生時代を仙台で送っており、仙台には知人も多い。研究会終了後、彼が仙台の一夜を、どのように楽しまれたかは、不幸にして明らかではない。

●1981年2月10日

テーマ 医療サービスにおける費用便益評価について

講師 東北大学医学部 関田康慶氏

A, B 2人の重症患者が、同時にC病院にサービスを求めてきて、C病院ではA, Bのうち1人にしかサービスできない状態にあったとする。このような場合、CがA, Bいずれにサービスするかは、医師の判断にゆだねられるであろう。どのような意思決定を下しても、それに対する賛否はつきものである。このような問題を含めた、医療サービスのあり方に対する関田氏の試論が紹介された。人の生命に関する問題だけに、参加者から多くの意見が出された。

関田氏は、1年半ほど前に関西支部より当支部へ移られた、当支部の若いエネルギー源で、今後の活躍が期待される。研究会終了後、ささやかな懇親会をもって、今年度の活動を閉じることとした。